

第4号（令和5年12月20日）

苫小牧市教育委員会 教育部
市史編集事務局

苫小牧市史編さんだより

〒053-0018

苫小牧市旭町4丁目4-9

TEL 0144-84-1385

FAX 0144-32-1233

市史に関する積極的な情報発信と多くの皆様からの情報提供をお願いし、「新市史」の充実をはかり、まちの歩みと先人の労苦を後世に伝えていきます。

講演抄録

「渋沢栄一から始まった抄紙会社 150年～語り継がれる王子製紙苫小牧工場の歴史～」

市史編さん事務局 武田 正哉

はじめに

明治6(1873)年2月12日、渋沢栄一(1840-1931)の提唱により、東京・下王子村(現・北区王子)に抄紙会社が設立されました。渋沢は「近代日本資本主義の父」とも称され、生涯に500近くの企業の育成に関わったとされる人物です。抄紙会社は西洋の技術を導入して国内で洋紙を製造する会社で、現在の王子ホールディングス(株)、日本製紙(株)のルーツとなる会社です。明治9(1876)年に「製紙会社」と改称し、明治26(1893)年には創業の地の名を冠して「王子製紙」となります。そして今から113年前の明治43(1910)年に、苫小牧工場が操業します。ただし、これは事業拡大が目的の積極的な進出ではなく、悪化著しい経営状態の打開のために三井財閥から大きな援助を受け、「王子製紙再建の社運を賭した」一大事業でした。北海道進出は成功し、昭和8(1933)年、王子製紙の名を継続しつつ富士製紙、樺太工業と合併し、34工場を有するいわゆる「大王子」が誕生します。しかし敗戦により、海外拠点を失い、昭和24(1949)年には進駐軍指令により解体を余儀なくされます。34工場のうち最大の工場規模を有していたのは苫小牧工場で、解体に際して工場は単独で「苫小牧製紙」を組織します。その後、王子の名は同社が引継ぎ、現王子製紙と苫小牧はこの工場を中心に発展します。以上王子製紙成立までの概略と苫小牧の関わりです。ここからは苫小牧工場操業に至るまでの鍵となる人物の回想を振り返ってみたいと思います。



渋沢栄一(1840～1931)
渋沢史料館蔵

1 渋沢栄一と抄紙会社

大正3(1914)年、当時74歳の渋沢栄一から聞き取った「王子製紙株式会社回顧談」では、渋沢が30歳時の記憶をたどり「抄紙会社」の創業について振り返っています。当時渋沢は明治政府の

おおくらしょうじょう 大蔵少丞という肩書で、おおくらたいていふいのうえかおる 大蔵大輔井上馨のもと実質大蔵省のナンバー2となっていました。

1)抄紙会社設立の動機

渋沢が製紙事業に気付いた動機は、慶応3(1867)年、パリ万国博覧会へ派遣される徳川慶喜の弟・昭武あまたけに随行するため、幕府使節団の一員として渡欧した際に、パリ万博開会式のナポレオン3世の演説が、翌日の新聞で報道されたことに驚き、新聞、印刷に興味を持ったことが最初だとされます。ロンドンに滞在した際には、タイムズ新聞社を視察しています。明治政府に仕えていた時に外国人から聞いた話と当時の経験が結びつき、日本で製紙業を成すべきと考えるようになったとされています。製紙業を立ち上げようとした時、渋沢自身は明治政府の官僚の立場であったため、会社の設立願書は三井組みのむらりすけの三野村利助と小野組ふるかわいちへえの古川市兵衛名義で提出されました。

2)設立願書

抄紙会社の立ち上げに際して、渋沢は欧米に倣い三井・小野・島田三組の「合本組織がっほん」にすることを考えます。合本組織とは現在の株式会社に似た組織で、公益追求のために人材と資本を集めて事業を行う考えに基づいた組織です。渋沢はヨーロッパでは合本組織によって商工業が発展していることに驚き、日本の官尊民卑の考えを打破するためには、合本組織によって商工業を発展させ、商工業者の地位を向上させる必要があると考えていました。ここで重要なのは、抄紙会社には日本の将来のため公益を重視するという考え方があったことです。大正5(1916)年「論語と算盤ろんごそろばん」を著し、「道徳経済合一説どうとくけいさいごういつせつ」という理念を説き続けた渋沢は、幼少期に学んだ「論語」を拠り所に倫理と利益の両立を掲げ、経済を発展させ、利益を独占するのではなく、国全体を豊かにするために、富みは全体で共有するものとして社会に還元することを説くと同時に自身にも心がけていました。現在の王子製紙の出発点にはこうした考えがあったことは忘れてはならないと思います。

明治6(1873)年2月、明治政府の紙幣寮から会社設立の許可がおりた抄紙会社でしたが、近代的な製紙業は国内ではほとんど前例がなく、海外から機械や技術を輸入しなければならない大がかりな新規事業でした。同年、官僚から実業界に転身した渋沢は第一国立銀行の総監役に就任し、翌年には抄紙会社の事務を正式に委任されます。この際、苦慮したのは工場敷地の選定でした。

3)工場設立の条件

渋沢の考えた工場敷地の条件として

- 1 製紙のための水せんかみ(千川用水)
- 2 交通・運搬のための川しやくじい(石神井川)
- 3 原料のポロが入手しやすい都市部近郊
- 4 地元が工場誘致に積極的

このように当時の王子村には、明治時代の製紙業にとって最適な条件が備わっていました。この条件は後年の北海道進出の際の苫小牧工場にもあてはまるものでした。ちなみに原料のポロというのは、明治時代初めまで西洋紙の原料はポロ布が用いられたからです。現在のように原料が木材パルプに変わるのは明治20年代以降です。

渋沢は王子製紙取締役会長となり会社の経営に携わります。しかし、技術上の問題から商品として通用する用紙はなかなか製造できませんでした。そこで身内の大川平三郎おおかわへいざぶろう(1860-1936)を渡米させ



錦絵「古今東京名所 飛鳥山公園王子製紙会社」明治16(1883)年
(公財紙の博物館 蔵)

て製紙技術を習得させ、帰国後ようやく品質の向上を図ることに成功しましたが、利益をだすまでには10年近くかかりました。その間、渋沢は製紙業の重要性と将来性を株主総会で丁寧に説明し、株主に配当が行われない無配を続けながらも損失補填のため増資を続けました。しかし、経営は困難を極め、明治31(1898)年には様々な事情により王子製紙を辞任します。

4)王子製紙株式会社に対する思い

渋沢は生涯に500社近くの企業に関わったとされますが、自身が経営に直接携わった企業はそれほど多くなく、大半は有能な人物に経営を委ねています。そうしたなかで王子製紙はおよそ四半世紀もの間、渋沢が経営に携わり、思い入れも強かったことが伺われます。

渋沢栄一が辞任した頃の王子製紙の状況を見てみましょう。「製紙会社」へ名称を変更した抄紙会社は、明治22(1889)年に静岡県けつた気田村に「気田工場」を開業。工場が軌道に乗った明治26(1893)年には社名を「王子製紙株式会社」へと改称。翌27(1894)年8月、日清戦争が勃発し、当時唯一の情報源ともいえる新聞が飛ぶように売れ、製紙会社の新聞需要も急増します。王子製紙も増産を目的に明治32(1899)年に静岡県なつかへ「中部工場」を操業し、資本金増資のため「三井銀行」に融資協力を申し入れます。この際、三井はふじやまらいた藤山雷太(1863-1938)を専務取締役として入社させることを条件に協力を約束し、取締役会長を務めていた渋沢栄一もこれを受け入れ融資交渉はまとまりました。

当時、王子製紙は渋沢の義理の甥で、娘婿でもある大川平三郎と渋沢の大蔵省時代の部下、たにけいせう谷敬三など渋沢の一族郎党が力を合わせて経営するファミリー企業となっていました。新たに赴任した藤山専務取締役は、渋沢の懐刀と言われた大川平三郎の経営方針を痛烈に批判し、大川と谷の降格を渋沢に申し入れ、渋沢にとっては「泣いてほしよく馬謖を斬る」人事が断行されます。しかし、役員人事に反感を抱いた社員がこの措置に反対してストライキに入ると、その責任をとらされた形で大川が辞職。さらに三井に融資を求めたいきさつから渋沢も辞任し、同時に渋沢系役員が総辞職して経営陣は一新され、藤山が陣頭指揮をとることとなります。しかし、渋沢と大川を慕う技術者や職工が軒並み辞めたため、生産部門が立ち行かなくなり王子製紙は深刻な経営危機に見舞われます。業績不振の一端は中部工場にありました。当時最新鋭の設備を誇っていたにもかかわらず生産性は著しく低く、他の2工場の機械老朽化と天竜川の洪水の頻発が経営不振に拍車をかけました。

一方、経営合理化に大ナタを振るった藤山雷太は、明治35(1902)年業績不振により王子製紙を追われ、同年、渋沢は請われて王子製紙の相談役に復帰しています。この後、三井工業部理事長のあさのきえいじ朝吹英二が兼務した一時期を経て、三井銀行神戸支店長のすずきうめしろう鈴木梅四郎が専務取締役に就任し、会社の再建に着手します。これにより王子製紙は北海道・苫小牧へ進出することになります。

2 北海道・苫小牧への進出

王子製紙は明治37(1904)年に北海道視察を実施し、その結果を受けて明治43(1910)年に苫小牧工場を操業します。この進出は「王子製紙の社運を賭した」一大事業でした。この決断をしたのは専務取締役鈴木梅四郎でした。鈴木は、明治36(1903)年から製紙工場の適地を求めて本州各地を探しますが、容易には見当たらず、翌37(1904)年9月に北海道へ渡ります。道東視察の後、三井物産小樽支店長おだりょうじ小田良治らの案内で9月30日から支笏湖周辺を調査します。

1) 明治 37 年 視察報告書

調査 2 日目の 10 月 1 日、鈴木ら一行は支笏湖からほど近い千歳川上流において、第一の滝(ナッソウ 寄せ木の滝)、さらに 8 キロ余り下流において最後の滝(ポロソウ 大滝)を発見します。同行した土木顧問技師の吉川三次郎よしかわさんじろうにより、この間の落差と水量により優に 1 万馬力の発電能力があるとの試算がなされます。この踏査により、製紙原料は期待したほどに恵まれていなかったものの、ナッソウの滝付近は水力発電に絶好の地であり、鈴木はすぐに水利権に関する仮出願書を提出。翌年には鈴木梅四郎、小田良治ら 8 名の連名で「水流使用及河中工作設置願」を北海道庁に提出しました。



千歳川第一の滝(ナッソウの滝) 明治42(1909)年頃 苫小牧市立中央図書館 蔵

水力発電所適地の発見と水利権の取得は王子製紙にとって、大きな分岐点になりました。調査隊が千歳川の発電所建設適地に辿り着けなければ、今の王子製紙そして苫小牧もなかったと思います。

2) 北海道進出に貢献した人々

成功の影には常に表に出ない人々の貢献があります。鈴木梅四郎の決断の背景には三井物産小樽支店長の小田良治の意見、帝室林野局札幌出張所の田代兵八たしろへいはちの案内がありましたが、実際の千歳川の案内者は土地に精通したアイヌ民族でした。現在、千歳第一水力発電所が立地する場所を水溜から見下ろすと、水力発電の適地はここしかない、よくこの場所を発見したと感心するばかりです。発見はこの地を熟知していたアイヌ民族の協力なくしてはあり得なかったと思います。

一方で、大規模な水力発電所は国内ではまだ例が少ない時代であることを考慮すると、優れた技術者の存在は欠かすことができませんでした。現在の東芝の前身である芝浦製作所は王子製紙同様三井傘下にありました。芝浦製作所の岸敬二郎きしけいじろう(1869-1927)は、王子製紙の電気顧問として後に初代苫小牧工場長となる高田直屹たかたなおき(1870-1942)とともにアメリカへ出張し、当時最先端の発電機メーカー G・E 社(ゼネラルエレクトリック社)製品の輸入をまとめました。岸は王子製紙にとどまらず国内の水力発電事業と電気化学工業の発展に寄与した技術者でした。

3) 千歳第一水力発電所・苫小牧工場建設に携わった人々

明治時代、西洋の技術を導入し近代化を推し進めた日本において、大規模な水力発電所建設の経験はなく、若い技術者が最前線で活躍する場がありました。こうした技術者の活躍は、苫小牧工場の建設にあたった竹田米吉たけだよねきち(1889-1976)の随筆「職人-建築家の回想」に記されています。竹田は東京神田で生まれ、大工棟梁であった父について修業をした後、工手学校(現・工学院大学)に進みます。卒業後、苫小牧工場の設計を担当した建築家横河民輔よこがわの横河工務所(現・横河建築設計事務所)に勤務し、苫小牧に赴任しました。竹田は苫小牧工場の建設の仕事



この工事は恐らく工場建設としては、明治時代を通じて未曾有の大工事であったのだろう。私はこの後の工場建設に、この苫小牧時代の経験を活用することができた。まことに人跡未踏ともいえる北海道の山中で、大水力工事をするための材料、輸送、砂利、砂の採取、碎石装置、セメントの俊約から火山灰を使用し、この採取粉整備、木材の流送設備から輸送など、建設工事としては、実に堂々たるもので、私の建築家としての矜を大きくする資料に充満していたのだ。

「職人」竹田米吉 著
昭和33(1958)年 工作社

を終え東京へ戻ります。そして横河民輔の学費援助により早稲田大学建築学科を卒業し、建築家として活躍します。昭和 31(1956)年に出版された「職人-建築家の回想」は日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した名著です。また、文学作品として千歳第一発電所をテーマに創作した作家に畔柳二美くろやなぎふみがいます。操業間もない明治 45(1912)年に発電所の社宅に技師の子供として生まれた畔柳は、その回想的な短編「山の子供」に発電所風景を鮮やかに記述しています。

3 苫小牧工場の建設

鈴木梅四郎が北海道進出を決め、発電所は千歳川沿いに、工場は苫小牧に立地することが決まります。工場誘致については千歳と苫小牧で激しい誘致合戦があり、両村では請願書や陳情書を提出します。企業進出の決め手は、地の利をはじめとする条件面が大きな比重を占めます。当時の苫小牧と千歳は水資源に恵まれていること、広大な土地を有することなど共通する部分がありましたが、苫小牧に利があったのは、輸送の便でした。明治 25(1892)年の北海道炭鉱鉄道の開通により苫小牧駅が開業し、空知の産炭地と港のある室蘭に直結していたことは原料や製品、石炭輸送が必要な王子製紙にとっては欠くことのできない要件でした。

王子製紙の苫小牧進出に際して、いち早く情報をつかんだ後の名誉市民小保方卯市おほかたういちの功績が広く知られています。小保方が王子製紙の進出を知ったのは、密かに計画が進められていた明治 38(1905)年初頭で、室蘭で開かれた新年会の席上、三井物産小樽支店長の小田良治から聞いたことが最初でした。明治時代後半の苫小牧では、情報は人を介して伝わるのが大きく、小保方の素早い情報伝達は製紙業進出を住民に周知させる上で効果がありました。

工場進出が決定した明治 39(1906)年、苫小牧の戸数は 809 戸、人口わずか 3,316 人でした。苫小牧の歩みを振り返ると、江戸時代後期からイワシ漁が盛んになった苫小牧は、松浦武四郎が記したように繁忙期には出稼ぎ人で賑わいますが、それ以外は定住者もわずか、まさに寒村という表現がふさわしい場所でした。

苫小牧の住民は同 39(1906)年 2 月、村長と工場誘致歓迎委員名をもって「陳情書」および「製紙工場等御企業二付寄付願」を提出し、村民有地の寄付、工場建設使役夫の提供を申し出ます。

また、王子製紙は苫小牧村に対して明治 39(1906)年 7 月に工場設置のため橋梁、道路その他の承諾、苫小牧川の永久譲渡などの申請を行いました。これらは村有財産であったため村会の議決を経て、王子製紙の要求通りに譲り渡しました。王子製紙では土地買収に際し、あらかじめ村内の土地所有者などを詳細に調べ、個人折衝にあたりましたが、当初は「今少しの出資(土地、労働力の提供)は将来数倍になって帰ってくる」と考えた村民も、いざ自分の土地になると手放しがたく、民有地買収には相当手こずったとされます。



完成した王子製紙苫小牧工場 明治43(1910)年

4 苫小牧川使用願と廃液問題

王子製紙は操業に先立って、明治 39(1906)年 6 月 15 日付で苫小牧川使用願を村長に提出しました。この願書に対して村会は慎重に審議を行いました。議長は村会諮問委員会を設置して、村の主産業であった漁業に影響を及ぼしてはならないとし、王子製紙鈴木梅四郎専務にこの説明を求めま

した。王子製紙は廃液を放流しても魚族の棲息には影響はないとしたため、村会はこの使用を許可し、村長は室蘭支庁に対し苫小牧川漁業権の譲渡申請を行い、明治 39 年 8 月 8 日をもって一時金 50 円にて永久譲渡しました。

しかし、いざ操業が始まり工場から廃液が流れると漁業に大きな影響がでます。この問題については漁民側が廃液除外施設、水産組合員の救済を中心に王子製紙と交渉しましたが取り上げてもらえず、道庁に対して窮状を訴え陳情書を提出しました。これにより村は王子製紙に相当の施設をつくる必要があるとの報告書を提出しました。ところが、漁業者代表が慰籍金^{いしよきん}3,000 円と漁業貸付金 2,500 円をもって問題を解決してしまい、道庁、村会に提出した陳情書を取下げ、廃液問題はあっけなく決着をみました。これは目先の利益だけを考え、将来を考えない措置であったといえるでしょう。



苫小牧沿岸でのイワシ曳網の様子 年代不詳

大正 7(1918)年には最大手の石垣彦三郎^{いしがきひこさぶろう}が漁場を手放すことにより、王子製紙は下請け業者の中村組に漁業経営を勧め、主要漁場は中村捨次郎^{なかむらしげじろう}の所有となります。その後も中村組は漁場を拡張し、漁民の不満を完全に断ち切ることとなります。

戦後、漁業制度の改革に伴い漁業は組合の免許制になります。これにより、廃液による漁業補償をめぐる問題は昭和 20 年代、40 年代に再燃します。その際も王子製紙は、苫小牧川に廃水を流す権利は明治 39(1906)年の苫小牧川の使用願が承諾されて以降、王子製紙の既得権としてあり、排水を流す以上苫小牧川周囲 2 キロは海水が汚れることが当然と主張、漁組に対して漁業権の放棄ないし漁業権不行使地域とすることを訴えます。

5 人材育成

操業時の王子製紙苫小牧工場では、最新鋭のアメリカ製長網抄紙機を導入し、新聞用紙の国内自給体制を確立しました。導入した抄紙機は 142 インチ・100 インチ長網抄紙機で 142 インチ抄紙機は抄き幅約 3.6 メートルで当時世界最大級でした。また、製造元のバグレー・シオール社に技師の派遣を求め、ヘンリー・ワズウォースという青年技師が来日します。技師から学んだことは運転前に機械を念入りに点検し、紙切れなど不測の事態が起こった時にはすぐに機械をとめ、点検と調整を繰り返すことでした。これにより機械の取り扱いの上手下手が問題ではなく、最も大事なものは運転前の整備と原料配合の適否だということ学びました。さらに、工場では技術顧問となったワズウォースを通じ、成績優秀な技師をアメリカへ留学させ、技術習得の制度をつくります。また、高等小学校卒業者を対象とした養成工補習学校を開設するなど、将来を視野に入れた技術者の育成も怠りませんでした。こうして年々進歩する製紙用機械や技術、アメリカの製紙業界の動きなどに精通した人材を輩出し、外国製新聞用紙の国内市場における恒常的な優位に歯止めがかかり、国内他社との競争でも優位に立ちました。人材育成を積極的に進めた人物は明治 44(1911)年に王子製紙の専務取締役^{せんむとくさつやく}に就任し、「製紙王」と呼ばれた藤原銀次郎



王子製紙苫小牧工場142インチ抄紙機 明治44(1911)年頃

(1869-1960)です。藤原は才能ある人物は身分の上下を問わず時期をみて次々と抜擢しました。この史実は、最先端の機械でもそれを動かし、活用するかは人材にかかっており、そのための工夫や育成は欠かすことができないということを伝えています。

6 カンパニータウン(企業城下町)～街へ与えた影響と都市ストック～

明治 43(1910)年の工場の操業により苫小牧の人口は7,210人へと増加し、大正 7(1918)年には町制を施行します。操業翌年、市街地は工場の余剰電力により電化され、中心部には電柱が立ち並びます。また、電力は苫小牧の工業を飛躍的に発展させます。明治 45(1912)年には余剰電力を利用し、苫小牧電気化学工場株式会社(現・デンカ株式会社)が開業しました。さらに大正 5(1916)年には、製紙廃液を利用して鋳物の鋳型用の砂を固める原料と染料を製造する末次商会苫小牧工場が開業します。また、工場建設に尽力した土木建築、機械修理の中村組や製品の運搬、原木、石炭の積み降ろし作業の小保方組、室蘭の栗林合名会社が元請けとして発展します。中村組は菱中建設・菱中海陸運輸となり、栗林運輸は現在も王子製紙と繋がりをもち、製造や運送の一翼を担っています。



苫小牧町停車場通りの景 大正11(1922)年

また、王子製紙では工場の建設や操業に携わる社員を東京から派遣する必要があり、「苫小牧でも東京の文化を享受できる」ことを説得材料にするため大正 4(1915)年に「娯楽場」を建設。東京の「明治座」をまねた本格的な劇場では歌舞伎が上演されました。また、操業前の鉄道事故をきっかけに明治 43(1910)年には、先進医療を施すことができる「王子病院」が開院、社員のほか住民の医療も担います。このほか、スポーツの振興にも力を入れ、屋内外のスケートリンクを設置。スケートは苫小牧を象徴するスポーツとなります。さらに、社宅の整備やスーパーマーケットの開業、保育園、幼稚園の設置、福利厚生の実施を図り、地域住民もその恩恵に預かり、都市生活を享受するようになります。



王子イーグル 大正15(1926)年

一方、電気や鉄道のインフラ整備をはじめ、文化、スポーツなどへの蓄積は現在も都市ストックとして苫小牧市に残されています。例えば「王子総合病院」「グランドホテルニュー王子」などは市民に定着し、アイスホッケー部を前身とする「レッドイーグルス北海道」やネーミングライツ契約を結ぶ「ネピアアイスアリーナ」は大正時代から続くアイスホッケー文化の遺産と言えます。さらに、明治時代の苫小牧進出とともに小樽から拠点を移したパンとお菓子の「三星」、迎賓館王子倶楽部の初代コック長から3代100年以上にわたって続く老舗レストラン「第一洋食店」など、王子製紙の歴史を背景に持つ企業や商店は枚挙に暇がありません。

7 まとめにかえて

最後に抄紙会社設立から150年、北海道へ進出して113年という長い年月を経過した王子製紙と苫小牧についてまとめてみたいと思います。

渋沢栄一が設立した抄紙会社は、文運発展のために製紙業という書籍や新聞を発行するうえで欠くことのできない業種を立ち上げ、先行する西洋へ追いつこうという明治期らしい気概に溢れたものでした。また、創業にあたっては私利私欲のためでなく公益を重視するという高邁な理想がありました。そのため国への支援も求めています。その後、会社は渋沢の手を離れますが、苦心惨憺のあげく、辿り着いた理想の地が水資源をはじめ立地に恵まれた北海道苫小牧でした。苫小牧では製紙業の興隆とともに漁業中心から工業へと街の在り方自体を大きく変えるような変化が起こります。税収の増加、電気をはじめとするインフラの整備、商工業の隆盛、文化活動やスポーツの充実など地域住民へは計り知れない影響が及ぼされました。一方で負の側面として、工場の稼働による環境問題も見逃すことはできません。廃液の流出による漁業被害のほか、昭和33(1958)年に起こった街を二分する労働争議は、王子製紙の単一工業都市としての難しさを住民の意識に植え付けました。操業から一世紀を越え、この街に住む人々にとって駅に隣接する大きな煙突と巨大な工場は日常の風景となり、60年前の苫小牧港開港と企業の集積は工業都市としての性格を明確にしました。



王子製紙株式会社苫小牧工場 2018年撮影

本日ご紹介した150年間の事例は、この地域において次世代半導体産業の誘致と稼働という姿で繰り返されています。今年2月千歳市に進出を表明したラピダスは、世界に後れを取った半導体産業を再興するため、生産に欠かせない豊かな水資源を求めました。抄紙会社が西洋文明に追いつくため創業し、王子製紙が発電や生産のために千歳川や苫小牧の水資源を求めたことと重なります。また、王子製紙に対して御料林の伐採を国が許可したように、国の多大な支援を受けることも進出を後押しする要因となっています。工場の建設には雇用が生まれ、創業後は多くの従業員が先端産業に就職することが見込まれます。道内の大学や工業高等専門学校も学科の充実に動いています。これも今から100年前に庁立苫小牧工業学校が開校したことに符合します。すでに千歳市の地価は高騰し、先日全国一の上昇率となりました。工場周辺の上下水道の整備もかつての苫小牧のように進むことでしょう。千歳に留まらず、苫小牧はじめ周辺市町にも波及効果があることと思います。人口減少対策や雇用創出につながる進出は道内全体で歓迎一色です。しかし、工場の稼働によって想定外の問題は必ず生まれます。これから先、不透明な部分も多いことは常に頭の片隅に置いておくべきだと思います。

最後に、この街の先人たちは豊かな自然と工業が調和するなかで暮らす郷土を選択しました。私たちにとっての郷土は苫小牧です。郷土とはそこに住むだけでなく、その風土と歴史に畏敬の念を持ち、地域社会の中に生涯にわたる人間関係をもっている場なのだと思います。苫小牧で操業から一世紀以上を経過した王子製紙も既にこの地に育まれた歴史の一齣になっていると思います。渋沢栄一が150年前に掲げた理想を顧みて、この街の歴史と文化を護り育てることが今後の街づくりに繋がる指針になると思います。

本稿は、令和5(2023)年11月19日(日)13時30分から15時まで苫小牧市文化会館で実施された「苫小牧市民文芸第65号 トークサロン」での講演を抄録したものです。

昔の苫小牧の資料を探しています。

まちの発展と歴史的事実を記録し、後世に伝える新たな市史を作成するために、昔の街並みや日常生活の様子が分かる資料等を探しています。

探している資料や情報 ～昭和以前の苫小牧について～

- 昔の紙の資料（古文書、手紙、日記、帳簿、絵葉書、絵図、賞状、会社や商店のチラシやパンフレット、記念誌、戦前の新聞、書籍、雑誌など）
- 昔の街並みや日常生活の写真や映像（フィルム、ビデオなど）

<連絡先>

苫小牧市教育委員会 教育部 市史編集事務局（苫小牧市立中央図書館内）

住所：〒053-0011 苫小牧市末広町3丁目1番15号

電話：0144-84-6008 FAX：0144-37-5656

